広島大学　学部・附属学校共同研究機構研究紀要
〈第34号　2006. 3〉

家庭科における乳幼児とのふれあい擬似体験学習に関する研究

柴　静子　一ノ瀬孝恵　日浦美智代　高橋美与子
今川　真治　宮本　栞　藤井　志保

はじめに

2004年度の広島大学学部・附属学校共同研究においては,「家庭科の保育領域におけるふれあい体験学習の効果に関する研究」というテーマのもとで，附属三原中学校での幼児との交流学習および附属中学校での赤ちゃん人形を使用したふれあい擬似体験学習を構築し，各種の調査を実施することに加えて授業を分析することによって，これらの効果と隘路について実証的に明らかにした[1)]。2005年度は，実際にふれあい体験学習を行うことができない場合に取り入れざるを得ない擬似体験学習に焦点を当てて，そのあり方について研究を深めることとした。なお，今回の研究では，近い将来に家庭をもち，親になるということが現実味を帯びてきている附属高等学校の生徒を対象とした。

ところで，2004年度に擬似体験学習の教材として使用した布の赤ちゃん人形[2)]は，約３キロ，50センチと新生児とほぼ同じ大きさの愛らしい顔立ちをしたものであり，生徒から好感を持たれたが，反応のない人形という隘路は優れた授業構成力をもってしても超えることはできなかった。そこで，2005年度の研究においては，アメリカで開発されたコンピュータ内蔵の泣き声を出すリアルケアベビー[3)]を用いて，ふれあい擬似体験学習の１つのあり方を提案することを試みた。具体的には，第１ステップとして，泣く乳児人形の世話をさせることによって，子育ての基本的な技能を学ばせる，第２ステップとして，絵本の読み聞かせの練習をさせ，その後に絵本を製作させる，第３ステップとして，０歳児に絵本をよみきかせることの意義について理解させる，という授業を構想し実践して，アンケート調査や授業分析を行う中からその効果と隘路を把握し，改善モデルを提案することにした。

なお，より効果的な擬似体験学習を構築するためには，実際のふれあい体験学習との比較から多くの示唆を得ると考えて，近隣の保育園で交流学習を長年行っている附属福山高校の実践をまず分析の対象とした。

Ⅰ　附属福山高等学校における乳幼児とのふれあい体験学習

1　指導のねらい

子育てにストレスを感じる親が多く，乳幼児虐待という憂うべき事態が少なからず発生している現代社会の中で，将来親になる高校生男女に対して，育児の知識や技術を入門的に教えることは重要である。それとともに，直接的に乳幼児とふれあう体験をさせることによって，生命の大切さや喜びを実感する心の教育をしていくことが大切であると考える。

附属福山高等学校では，ここ10年間，保育学習の一環として保育園を訪問する時間を設けて，単元の導入としたり，実際に園児と一緒に過ごしたようすを想起させる授業を構成し，生徒の知識面とともに情意面の変容を図る授業を行ってきた。

2005年度は，高橋美与子教諭の指導により,「家庭基礎」２単位の授業中で，高校２年生の２クラス（B，E組:計83名）が９月に「ももやま保育園」[4)]を訪問し，ふれあい体験学習を行った。

保育園訪問のねらいは次の通りであった。

①訪問の目的や訪問時の留意点を考えることを通して，年上のお兄さんお姉さんとして接することの自覚を高め，自分たちにとっても園児たちにとっても貴重な体験になることを意識する。
②実際に訪問することを通して，保育園の様子（教室や遊具の実際など）・園児の様子（身体の大きさ，言葉の発達，遊びの種類など）・保育士の園児への接し方（ほめ方，しかり方など）などを理解する。
③幼いこどもの愛らしさやいとおしさを実感する。
④幼児と接する楽しさと共に難しさに気付く。
⑤自分の幼い頃を振り返ることができる。
⑥園児と接する友人の様子を見ることで，友人の新たな面を発見する。
⑦保育の授業を受けるにあたっての課題を発見する。

Shizuko Shiba, Takae Ichinose, Michiyo Hiura, Miyoko Takahashi, Shinji Imakawa, Shihori Miyamoto, Shiho Hujii,: Simulation of Contact Learning with Babies and Infants in Homemaking Education

表１　附属福山高校におけるふれあい体験学習の指導過程（指導者：高橋美与子教諭）

学習内容	生　徒　の　活　動	指　導　上　の　留　意　点
１．ももやま保育園の紹介	(1)ももやま保育園の年齢構成・クラスの名前・日課時限など具体的な様子を聞くことで，園児の園での生活の様子をイメージすることができる。 (2)それぞれの年齢の子どもの特徴を踏まえて担当を希望する園児の年齢を決める。 （１歳児～５・６歳児　）	・以前訪問したときの教師の感想や園長先生の思いなどをつけ加えながら，園児の気持ちに少しでも触れることができるようにする。 ・なるべく男女のバランス，配当人数のバランスがとれるように，配分する。
２．訪問の目的と留意点 (50分)	(3)訪問の目的・留意点を考えることで，園児とどのように関わっていくのかを具体化させていく。 目的　・成長の様子を実際に見て確かめる。 ・どんなことばを使えるのかを知るなど。 留意点　・けがをさせないように気をつける。 ・言葉づかいに注意するなど。	・この訪問が自分たちにとっても園児にとってもとても意義のある体験になるようにということを考えさせる。
３．訪問	(4)保育園の朝の会に参加して，一緒に体操をした後，それぞれ担当のクラスに分かれる。 ①クラスでの活動（園の保育内容に参加する。） ・散歩に出かける。 ・白玉だんご作り ・運動会の練習など ②帰校時間になるまで，担当クラスの園児と自由に遊ぶ。 ・砂遊び，鬼ごっこ，滑り台などの外遊び	・行く前に全員が考えた目的と留意点を示して，確認させる。 ・危険な行為がないように、しっかり園児とふれあうことができるように助言する。
４．訪問の記録 (100分)	(5)訪問しての気づき・感想などをまとめる。 ・身体の大きさ　・遊びの様子 ・ことばの発達について　など	・記録は次の時間までに各自でまとめさせる。なるべく具体的に記入させる。
５．記録の発表 (50分)	(6)訪問の記録をグループごとにまとめて発表する。それを聞くことで，自分が担当できなかった年齢の園児の様子を理解することができる。	・自分が担当した園児の様子と比較しながら聞くようにさせる。 ・それぞれの年齢の特徴を発表の内容からおさえ，成長の著しい様子と乳幼児期の重要性について説明する。

⑧友人の訪問した感想を聞くことで，自分は気づかなかった園児への思いに気づく。

２　指導計画

合計４時間を指導にあてた。次の通りである。

① ももやま保育園の紹介 ……0.5時間
② 訪問の目的と園児とふれあうときの留意点 ……0.5時間
③ 訪問（９月16日および20日）……２時間
④ まとめと発表……１時間

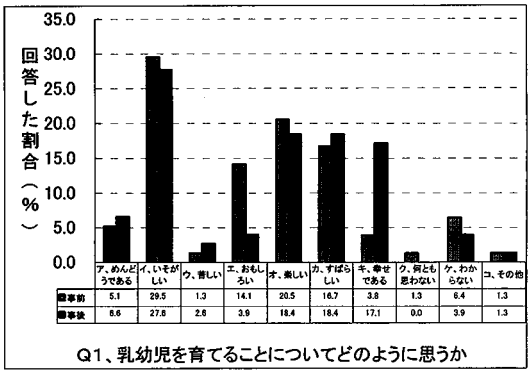
３　指導過程

４時間のふれあい体験学習の過程を表１に示した。

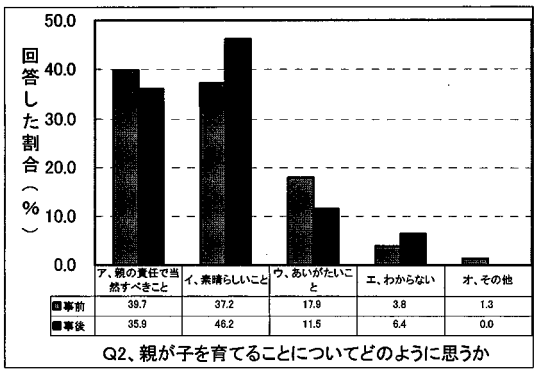
４　教師の観察と感想

幼児とのふれあい体験学習後の記録には，生徒は，園児の心身の発達や遊びなどについて，実に多くのことを発見し，幼きものとのふれあいを心底楽しんだことが記されている。

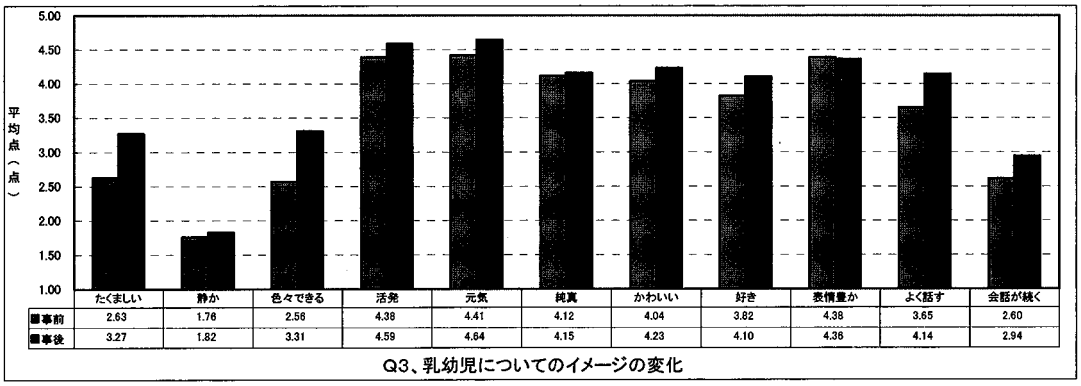
保育園訪問の目的を「秘めたる父性の発揮」と書いた男子生徒は，１歳児と散歩に出かけている間中，園児の背の高さに合わせて腰を屈め，ずっと話しかけていた。普段の授業からは想像もつかない姿であった。



Q1、乳幼児を育てることについてどのように思うか



Q2、親が子を育てることについてどのように思うか



Q3、乳幼児についてのイメージの変化

図１　附属福山高校生の子育てに関する意識

彼は，帰る途中「腰が痛くなった。」と言いながらも，とても充実した笑顔を見せてくれた。多くの生徒にとって，幼児とのふれあいは，感動とともに自分にもこんな純真な時期があって今があるのかと，自己を見つめ直すきっかけにもなったようである。

園の前まで行くと，園児たちが屏の向こう側からお兄ちゃん，お姉ちゃんと競って声をかけてくれる。生徒たちの表情は自然に和んでくる。生徒たちにとって自分たちを無条件に受け入れ，信頼を寄せてくれる園児たちとの出会いは何事にも代え難い体験であると，今年も実感したふれあい体験学習であった。

５　生徒の子育てに関するイメージ調査から

それでは，生徒はこの４時間のふれあい体験学習によって，子育てに関するイメージをどのように変化させたのであろうか。

図１は，ふれあい体験学習の事前と事後に行ったアンケート調査の結果を示したものである。なお，調査日は，事前が平成17年９月９日（Ｅ組）と16日（Ｂ組），事後が９月27日（Ｂ組）と10月７日（Ｅ組）であった。調査対象者数は83名であった。

質問１では，「乳幼児を育てることについてどのように思うか」（１つ選択），質問２では「親が子を育てることについてどのように思うか」（１つ選択），質問３では「乳幼児のイメージについて」尋ねた。

図１のＱ１が示すように，子育てに関する事前の見方は，「いそがしい，楽しい，すばらしい，おもしろい」の順に多かったが，学習後は，「いそがしい，楽しい，すばらしい，幸せである」というように，「子育てしあわせ感」が出てきたことが特徴としてあげられる。これと連動して，Ｑ２では，子育てを「親の責任であり当然すべきこと」という義務的な見方から，親として子育てに関わることが素晴らしい，と感動的に見るようになったことが示されている。さらにＱ３では，実際に幼児とふれ合ってみて，思っていたより，元気で活発であり，よくおしゃべりをして会話も続く，案外，いろいろなことができてたくましい，かわいくて好きだ，という気持ちが強くなったことが示されている。

このように，実際に幼児とふれ合うことから得るものが大きいことは，教育現場では周知のことである。それでは，乳幼児との直接的なふれあい体験ができない事情にある場合は，どのように擬似体験学習を構成すれば「子育てしあわせ感」や幼い命への感動を呼び起こすことができるのであろうか。附属福山高等学校での成果を念頭に置きながら，附属高等学校においてふれあい擬似体験学習のあり方を模索した。

Ⅱ　附属高等学校におけるリアルケアベビーによるふれあい擬似体験と絵本製作学習

1　指導のねらい

2003年度より順次実施されている新学習指導要領では内容構成が変化し，「家庭総合」の場合，衣食住という物を対象とした内容が減少し，家族や乳幼児，高齢者など人を対象とする内容が増加した。「家庭総合」の内容である「人の一生と家族・家庭」においては，「子どもの発達と保育，子どもの福祉などについて理解させるとともに，子どもの健全な発達を支える親の役割と保育の重要性や社会の果たす役割について認識させ，子どもと適切にかかわることができるようにする。」ことがねらいとされている。

ここでは，子どもが育つ環境としての社会の役割・福祉について考えることが学習課題とされており，現代の社会状況である少子化への対応としては，乳幼児の発達と保育に関する学習の充実が挙げられている。乳幼児の心身の発達と特徴及び子どもの生活と遊びについて理解するためには，幼児と直接にかかわる機会を持つことが大切であることは言うまでもないが，授業時数削減に伴う限られた時間の中では，そのような機会はなかなか持ちにくい現状である。

2004年度の学部・附属学校共同研究では，附属中学校の３年生を対象として，幼児とのふれあいの機会をもてない場合の体験的学習として，布でできた赤ちゃん人形に接触させる場面を設定し，その人形を通して自分の発達や人とのかかわりを学んでいくことができるかどうかを検証した。その結果，直接的な体験学習の効果には及ばないものの，小さきものへのいとおしさやかわいく思う気持ちの醸成に寄与することが認められた。しかし，反応が全くない人形を実際の乳児に見立てるのは，実際には無理があるように思われた。

そこで，2005年度の研究では，アメリカで開発されたコンピュータ内蔵により泣き声を出す赤ちゃん人形「リアルケアベビー」を８体導入して，乳児とのふれあい擬似体験学習にリアリティーを持たせることを考えた。

指導のねらいは，リアルケアベビーの世話を通して，乳児の発達に関する初歩的な知識や育児技能を習得させること，次いで，絵本を赤ちゃんに読み聞かせる場面を設定し，親子で絵本を楽しむというシミュレーションを行わせること，その後，絵本を製作させ，０歳児においても絵本が効用もつことを理解させることで，生徒の人間的な感情の醸成と自らの成長に関する理解の深化を図ることとした。

実験授業は，広島大学附属中・高等学校の高校２年生１クラス（男子21名，女子18名）で行った。授業時間は2005年７月13日～12月８日のうちの断続的な9時間であった。授業は同校教諭の一ノ瀬孝恵が担当し，事前事後のアンケートについては同校の日浦美智代が実施した。

2　指導計画（全９時間）

第１次　リアルケアベビーのお世話しよう
　　絵本を読み聞かせしよう……３時間
第２次　絵本をつくろう……５時間
第３次　絵本の効用……１時間

3．指導の内容

一連の授業は次のように展開した。

(1)　指導目標

①　乳児の世話をするとともに，泣くことの意味を知り，心身の発達への理解を深める。
②　乳幼児に対し，上手に絵本の読み聞かせをすることができる。
③　絵本を工夫して製作することができる。
④　なぜ，乳幼児に絵本が必要なのか，その効用を考えることができる。

(2)　指導過程

第１次では，「赤ちゃんのイメージ」について，18項目のアンケートを行なった後，リアルケアベビーの世話をさせるとともに，このベビーを抱いて絵本の読み聞かせを行わせた。具体的な展開は次の通りである。

最初に，リアルケアベビーの世話をすることを告げて，５人（または４人）のグループを８つ作った後，各グループの一人に教室後方の台上に寝かせておいたベビーを連れに行かせた。赤ちゃんの抱き方やミルクの与え方については，VTR「赤ちゃんなぜ泣くの？」（山崎教育システム株式会社編集）を視聴することで確認させた。続いて，赤ちゃんはどんな時に泣くのかについて考えさせ，泣くことによって，様々なことを要求していること，おなかがすいてミルクがほしいときやオムツを替えてほしいときなどに泣く欲求の涙と不快な姿勢にされたときなどに泣く拒絶の涙があることを理解させた。

その後，リアルケアベビーの扱い方を書いた資料を配布してコントローラの使用方法を理解させ，各グループで練習モードで15分程度，ベビーの世話をさせた。その際，泣いているベビーを必ず一人一回ずつ抱き，あやすように指示をした。

なお，練習モードの内容は次の通りである。

①「ミルク編」：ミルクをほしがって泣くので，正しい姿勢で30秒間ミルクをあげると「クー」というハッ

ピーな声を出す。

②「ゲップ編」：ゲップを要求して泣くので，抱いて背中を30秒間軽く叩くとゲップをする。

③「おむつ編」：おむつ替えを要求して泣くので，おむつ交換をすると満足して「クー」という。

④「あやす編」：やさしく揺らしながらあやすと「満足して「クー」という。

⑤「ぐずりとせき編」：14秒間ぐずった後泣きやみ，90秒後にせきをする。

以上の５つの泣き方で，泣いている赤ちゃんの抱き方やあやし方を擬似体験させた。これらの体験を通して，生活リズムや基本的生活習慣を作りだすことの必要性を理解させた。

続いて，乳幼児との親密な交流の一つである絵本の読み聞かせをすることを知らせ，前もって生徒たちに調査していた「よく読んでいた絵本」の名前を紹介するとともに，準備しておいた絵本（50冊）のうち一部を見せて絵本への思いを深化させた。また，広島市でボランティアとして絵本の読み聞かせを行っている池田幸子氏のビデオ[5]を試聴させ，ポイントをまとめた上で，グループごとに赤ちゃん人形の年齢を設定させ，読みたい本を一冊選ばせて，読み聞かせの練習をさせた。練習が終わった班から，抱っこしたベビーに絵本の読み聞かせる体験をさせて，感想をまとめさせた。

第２次では，絵本製作上の注意点を説明し，製本までの過程を知らせた後，絵本のストーリーを考えさせた。次いで，下絵書き，仕上げと５時間で絵本の製作を行わせた。

第３次では，乳幼児になぜ絵本が大切なのかという「絵本の効用」について，特に０歳児の場合を取りあげて，主に教師が説明をするという方法で理解させた。表２は，ＶＴＲに録画した授業の記録を文字に起こしたものである。

表２　「絵本の効用」の授業内容の記録

T：　今までみなさんが頑張って製作した絵本が出来上がってきました。そこで，これをどんなシーンで使うのがいいのかを考えてみたいと思います。まず，自分の絵本の題名を書いてみましょう。また，テーマはなんだったのかを書いてください。簡単な言葉でいいですし，単語で書いてもかまいません。あなた達の作った絵本は，対象年齢が２歳から５歳のあたりまででしたね。S1さんのテーマは何ですか。

S1：　テーマは国際理解と乗り物への理解です。

T：　国際理解と乗り物への理解，難しいですね。S2さんはどうですか？

S2：　世の中みんな繋がっている。こどもに，世の中がみんな仲良く繋がっているということを分からせるテーマにしました。

T：　なるほど。では，今から，絵本と子どもの読書の関係について考えてみましょう。S3さんは１か月にどれ位の本を読みますか。

S3：　３冊です。

T：　では，みなさんに聞いてみます。一年あたり最低でも５冊読むという人は挙手をしてください。（生徒，多数手を挙げる。）
なるほど，何人もいますね，では１カ月最低でも１冊は読む人は結構いますね。
プリント資料に全国４年生以上中学校高校男女含めて９学年分を，1954年から毎年，1カ月間にどれだけ読んでいるのかを調査した結果が出ています。学校読書調査[6]といわれるものですが，これから何が分かりますか。

S4：　小学生で読んでもらった人は，８割ぐらいいます。

T：　逆にいえば読んでもらったことのない人が２割いるのですね。男女別で見るとどうですか。女の子の方がよく読んでいます。幼児期によく本を読んでもらった生徒や児童と，読んでもらわなかった児童や生徒の割合がプリントに書いてあります。これを見ていくと絵本をよく読んでもらったほうがどうも読書量が多くなるのではないかということがグラフから言えそうですね。いつ絵本を読んでもらいましたかという質問ですが，保育園や幼稚園に入ってから卒園するまでがが多いです。それから，皆さんに調査したことがありますが，全国調査でも人気のある本ランキングだと，１位はグリとグラシリーズですね，それからとノンタンシリーズ，それから桃太郎や３匹の子ブタという童話のシリーズも人気があるようです。
　では，今から脳の働きを探ったVTRをみてもらいたいと思います。なぜ，絵本，絵本と言うのだろう，みんなの脳が何か感じ取るものがあるかどうかを考えて見ましょう。脳の仕組みとどのようにしたら脳が活性化するのかというところをみて欲しいと思います。（ＶＴＲ[7]視聴）

T：　前頭前野というところが，簡単な計算でよく働き，難しい計算の時はあまり働いていないということがわかります。これはどういうこと

なのだろうということなのですが。

広島県尾道市の土堂小学校では，100マス計算といわれる簡単な計算を取り入れています。数字を縦と横とに並べて，その計算をしていくわけです。何分できるが，具体的に数ヶ月の間でどんな結果が得られたかといいますと，学力はかなり向上して，それから児童たちに落ち着きが出てくるというように，よい結果がたくさんでてきているようです。

このような計算はお年寄りにも効果があるそうです。たとえば，認知症が始まった人が話せるようになったり，会話ができるようになったという研究結果が出されています。また，私たちは肝心のことをお互いに繰り返しながら，キャッチボールしながら言うとよい結果が得られるのではないか，ということが考えられています。

T：　次の内容をちょっと見ていただきたいと思います。赤ちゃんはこの世に生まれ出るとき，何もない原野に生まれてくるわけではないのです。皆さんが生まれた頃にはすでに，ゲーム機とか，いろんなものが周りにありました。すなわち，人間が作った文化の中で生まれ，これを持続していくわけでが，そんな中でやはりそのような文化の世界を自分の中に取り込もうとする力を持っています。みんなにあたえられた外的刺激として受け止めるだけではなく，自分たちが発信していく，すなわち相互的に関わっていくことがわかります。それから自己を作り上げていくと同時に，外界を作り替えていく力も持っているということです。お互いにしっかり受け答えをしあっていく，そのような環境にないといけません。

T：　赤ちゃんで実験した例があります。みんなの前に赤ちゃんがいます。

（リアルケアベビーを登場させる）

生まれながらに持っている赤ちゃんの能力を調べた正高信男という先生がいます。赤ちゃんはお母さんの声を聞きわけるのか，どの人の声でもついていくのかを実験したのです。

赤ちゃんにヘッドホンをセットして，寝かせます。ヘッドホンから声が流れてきます。まずお母さんではない A さんの声を聞かせます。そうすると，赤ちゃんはおしゃぶりをしきりに吸い始めます。しかし，聞き飽きてくるのかだんだん吸わなくなって，くわえているだけになります。そこで，B さんの声を流してみるのですが反応はありません。C さん，D さんの声を流しても同じなのですが，最後にお母さんの声を流すと劇的におしゃぶりを吸い始めます。母親の声を聞きわけてコミュニケーションをとろうとしている小さな０歳児がそこにいるのです。

T：　語りかけることが効果的であるという例が海外で報告されています。１日30分間，赤ちゃんにいろいろなことを穏やかな気持ちで語りかけようという活動です。こうしなさいと高圧的にいうのではなくて，自然に語りかけるということが必要になるわけで，そうするとですね，IQ や前頭前野の働きが伸びるのだそうです。

１日30分ずつ語りかけを行うことでそういうよい結果が報告されたのです。でも，赤ちゃんは言葉がまだわからないはずですよね。

T：　では，プリントにまとめていきましょう。

赤ちゃんは２，３ヶ月だったら言葉ではぜんぜん反応できません。だから，親が語りかける場合でも，私を見てくれると嬉しいよ，という風に願って語りかけると，赤ちゃんは自分が笑ったりすることでいつも親が喜んでくれるので，もっと笑おうとか，もっと泣いてみようというように反応していくのです。１日30分語りかけることで，赤ちゃんは自分のやることは相手に反応させる効果があることがわかり，自分で発信していくことができるようになると言われています。

T：　続いて，どのようにして言葉を覚えていくのかを考えてみましょう。最初は言葉をメロディーとして聞いているのですが，何度も何度も周囲が言っていると単語の連続に聞こえてきます。知っている単語のお互いの連続が一つずつ切れて理解していき，それが言葉となって理解していくということになっていきます。そして，次第に記憶として蓄積できるということです。そんな中で，子どもが記憶として蓄積したら最終的には１歳２，３カ月ぐらいから言葉を発していけるようになってくるのです。みなさんが作った絵本は，２，３，４歳，もっと上の子たちへのものが多ですが，適した本を与えて，読み続ければメロディーとしてだけではなくて，最終的には言葉を蓄積していくということにつながり，それがより効果的に行われていくだろうということが言えるわけです[8]。

T：　ブックスタートというシステムがあります。

赤ちゃんの言葉と心をはぐくむためにはこういうふうに抱っこして(リアルケアベビーを抱きながら)，あたたかい環境の中でぬくもりを感じながら語りかけることで，いろんな言葉を最終的に発するための訓練ができるということから考え出されたもので，親と子のかけがえのないひとときを絵本を介していっしょに過ごしてみようというところからこの運動が始まりました。

これは，1992年イギリスで始まりました。当時イギリスでは，男女がともに働く環境にある中で，赤ちゃんや子どもたちをどのように育てていけばよいのかということが社会の問題でした。イギリスで1990年に生後３ヶ月の赤ちゃんたちに，まず語りかけることを行ってみようということで絵本を読む運動が始まりました。その効果が顕著に見られたことから，日本でも始まったのです。イギリスで2001年には92%もの自治体が参加しています。ほとんどの子どもが，生まれて３カ月ほどして絵本をもらっているのです。子どもの基礎学力の向上とか，親子の会話が盛んになるというよい結果がたくさん報告されたので，日本では子ども読書年推進会議が2000年を子ども読書年とし，これを受けてブックスタート運動が始まりました。

T： 2001年４月にブックスタート支援センターができ，そこから日本全国に広げられていき，現在たくさんの自治体で多様な活動が行なわれています。広島県でいえば，竹原市や三原市がこの運動を進めています。竹原市では，子育てガイドを出しておりますが，その中のブックスタートに関するページをプリントにして皆さんに配布しています。竹原市では，0歳の子どもは年間に200人ぐらいですが，その子どもの親に子育てガイドブックを配布します。

2005年からは，生後４カ月の赤ちゃんに「いないいないばあ」という絵本を配っています。子どもたちの健全な発育をみんなで支えていくために，地域でブックスタートという取り組みを行っていることを知ってほしいと思います。

（この授業に関するアンケートを実施して終了。）

以上が，７月13日から12月８日までの９時間で指導した乳幼児とのふれあい擬似体験学習の流れである。

４．リアルケアベビーを導入した授業の成果と課題

(1) 第一次授業のアンケート調査にみる生徒の意識の変化

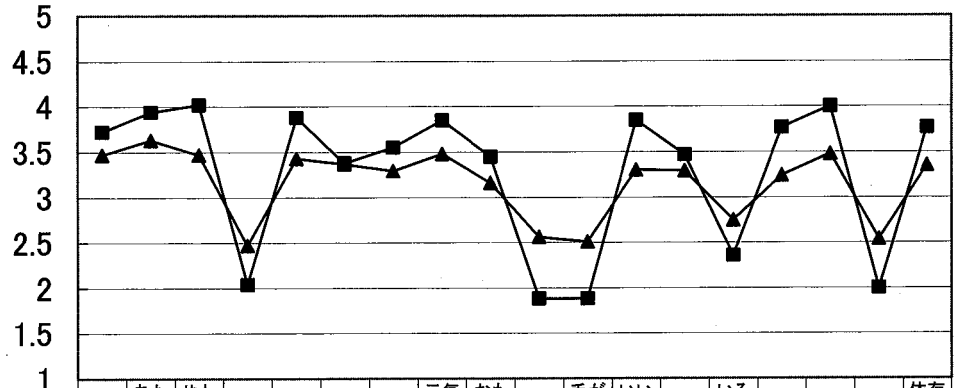
７月13日の授業で，赤ちゃんに対するイメージアンケートを行なった。当日１名の欠席者があったため，回答は38名より得た。調査結果は，図２のとおりである。

今回の授業対象クラスの生徒で，きょうだいのいない生徒は２名であった。今までに赤ちゃんと触れ合った機会があると答えた生徒は28名で，赤ちゃんに興味のある生徒は23名，世話をしてあげたいと思う生徒は19名であった。

アンケートは，昨年度の中学生を対象とした質問事項と同じであるが，幼児ではなく赤ちゃんについて①明るい（暗い），②あたたかい（つめたい），③やわらかい（かたい），④強い（弱い），⑤かわいい（にくらしい），⑥楽しい（つらい），⑦好き（嫌い），⑧元気がある（元気がない），⑨おもしろい（つまらない），⑩静かな（うるさい），⑪手がかからない（手がかかる），⑫いいものだ(わずらわしい)，⑬素直な(わがままな)，⑭いろいろできる（何もできない），⑮活発な（おとなしい），⑯甘える（甘えない），⑰安定した（不安定な），⑱依存している（依存していない）の18項目とした。赤ちゃんのイメージを対照的な表現で表し，前半のイメージに非常に近いものを５点，後半のイメージに非常に近いものを１点として，得点化し，平均点を算出した。図２を参照されたい。また，第一次の実験授業後に行った事後アンケートでは，事前アンケートの18項目の質問に加え，リアルケアベビーに接した感想を自由記述させた。表３は感想をまとめたものである。

学習前の生徒の赤ちゃんに対するイメージは，図２が示すように，あたたかくてかわいく，元気があり（活発であり）いいものたが，弱くて，うるさく手がかかり，何もできない存在であるというものであった。リアルケアベビーに触れて絵本の読み聞かせをした後では，赤ちゃんのイメージ自体は変わらなかったものの，平均値に変化がみられた。すなわち，前者のあたたかくてかわいいなどのイメージは値がより高くなり，静かで手がかからないなどの項目は値がより低くなった。リアルケアベビーに接することで，生徒たちは，表３の感想①，②，③，⑥，⑯にあるように，泣きやまない赤ちゃんの世話に難しさを感じ，感想⑬，⑲のように手のかかる存在であることを体感したため，図２の項目「⑩静かな」や「⑪手がかからない」の値が著しく低下したものと思われる。

このことから，リアルケアベビーの世話は，育児の大変さをより理解させるうえで有効であったといえる。



	明るい	あたたかい	やわらかい	強い	かわいい	楽しい	好き	元気がある	おもしろい	静かな	手がかからな	いいものだ	素直な	いろいろでき	活発な	甘える	安定した	依存している
▲ 事前	3.47	3.63	3.47	2.47	3.43	3.37	3.29	3.48	3.16	2.56	2.51	3.3	3.29	2.75	3.24	3.48	2.54	3.35
■ 事後	3.72	3.94	4.02	2.04	3.88	3.38	3.55	3.85	3.45	1.88	1.88	3.85	3.47	2.36	3.77	4	2	3.77

図２　リアルケアベビー体験学習による赤ちゃんのイメージの変化

対児感情については，表３の感想⑨，⑫，⑲が示しているように，あやすことを楽しみ，赤ちゃんをかわいく思う生徒や，感想⑧や⑩のように，実際に赤ちゃんと接するときを想定し，不安を感じる生徒もいた。

表３　リアルケアベビーに接した感想

① ベビーパウダーの香りでよいそうだった。赤ちゃんの泣き声って，いてもたってもいられなくなる。（男子）
② 時々本気になっている自分がいて，おもしろかった。泣きやまないとしんどいので，これが毎日だったら大変だと思う。（男子）
③ 泣きやまなくて大変だった。母は大変だ。（男子）
④ 本当の赤ちゃんよりも大変だった。（女子）
⑤ 実際赤ちゃんを抱いたことがあるけど，赤ちゃん人形より簡単だった。（女子）
⑥ 泣き声が激しかったけど，抱っこしていると手とかかわいかった。首が人形とはいえ，ぐらぐらしているので，けっこう安定させるのは難しかった。（女子）
⑦ 赤ちゃんはけっこう重い。また，泣きすぎる。首は優しくしないと危ない。（男子）
⑧ 重量感があった。人工のものだったけど，本物のときこんなふうに扱ったり対処できるか考えるとちょっと不安になった。（男子）
⑨ 泣きやんでくれたときはとてもうれしかった。赤ちゃんをあやすのはとてもおもしかったし，かわいかった。（男子）
⑩ 人形だからまあよかったけど，本物だったらけっこう大変なことになっていると思う。泣き声もあんなものではないし。（男子）
⑪ かわいい。本物はもっと大変なんだろうなぁ。（女子）
⑫ あやすのが難しかったが，かわいかった。（男子）
⑬ 目が恐く，妙にリアルだった。泣き方の違いがわからなかった。（女子）
⑭ 首がすわっていなかったので，抱っこしにくかった。思ったより重かった。（女子）
⑮ 自分がいくらあやしても泣きやまなくて赤ちゃんの世話は難しいと思った。（女子）
⑯ ちょっと恐かったけどあやすのは好き。（女子）
⑰ 首がカクンとなるのがこわかったけど，次からは気をつけられると思う。やわらかいイメージとは違ってたけど，抱いてあやしたことはなかったので貴重な体験だった。（女子）
⑱ 赤ちゃんを育てるのは予想以上に大変だと思った。（男子）
⑲ かわいらしかった。戸惑うことが多かったけど，それなりに楽しかった。（女子）

(2) 「絵本製作および絵本の効用」授業後のアンケート調査にみる意識の変化

第二次および第三次の授業が終わった後，絵本製作および絵本の効用についての事後アンケートを行った。表４および表５はその結果を示したものである。

表４は，「絵本製作の楽しさ」（項目１），「絵本を０歳児に読むべきか」（項目２），「絵本を読むことが好きか」（項目３），「ブックスタートの評価」（項目４），「絵本の効用に関する理解」（項目５），「絵本製作への意欲」（項目６），「他人に自作絵本を見せることに対する意欲」（項目７）について，「とてもそう思う」を５点，「少しそう思う」を４点，どちらでもない」を３点，「あまりそう思わない」を２点，「全然そう思わない」を１点として得点化し，平均点を算出したものである。

絵本製作が楽しくて意義ある学習活動であったことは，表４の項目１～６までの高い評価点および表５の感想①，②，③，⑧，⑭から知ることができる。

絵本は，対象年齢を乳幼児としたため0歳児向けから５，６歳児向けのさまざまな内容をもつものが製作された。ストーリーを考えるのに時間のかかった生徒が多かったが，「いないいないばあ」（松谷みよ子／文，瀬川康男／絵，童心社，1967）など，市販の名作絵本を多数準備して参考にさせたことにより，アイデアが浮かばない場合はそれらをベースに考えることができた。出来上がった絵本は，数や，色，形を教える教育的な内容のものや，なぞなぞ，夢を与える物語，しつけの要素を含んだものなど，ストーリーも絵も優れているものが多かった。他の人に紹介するのはあまり気が進まないといいつつも，お互いに製作した絵本を熱心に読みあっている姿が見受けられた。

さらには表５の②，⑤，⑩からも読みとれるように，０歳児を中心として，なぜ乳幼児に絵本を読み聞かせるのかということについて，学問的成果をもとにして伝えたので，その意義を理解し，子どもに絵本を読んであげたいという気持ちが培われたようである。

表４　絵本製作および絵本の効用の授業評価

項　　目	点数
1. 絵本作りは楽しい	４．２
2. 絵本を0歳児に読むべきである	４．１
3. 絵本を読むのは好きだ	３．９
4. ブックスタートはよい活動だと思う	４．３
5. 絵本の効用がよくわかった	４．３
6. また絵本を作りたい	３．６
7. 作った絵本を他の人に紹介したい	２．８

表５　絵本製作および絵本の効用の授業の感想

① 絵本作家はすごい。色をぬることやどの色を使うかにすごく気を使って描いた。（男子）
② 子どもがどんな内容の絵本を喜ぶのかといったことをまじめに考える機会ができ，将来のよい勉強になったと思う。今後に生かしたい。（女子）
③ 楽しかった。何気ない絵本にもいろんな工夫があることがわかった。（女子）
④ 絵本を読んでもらいうれしかった記憶はあるのだが，そのような絵本を作るのは難しい。（男子）
⑤ 小さいころの語りかけや読み聞かせがとても重要だとわかった。私も子どもにそういうことをしてあげたいと思う。（女子）
⑥ 昔の思い出がよみがえった。自分がしてもらったように，子どもや孫にしてあげなければならないと思った。（男子）
⑦ 何か懐かしい感じがするのは，母が弟に読んでいたのを一緒に聞いたりしたからかも。（男子）
⑧ 楽しい体験ができた。（男子）
⑨ 子どもがこれを通して何を学ぶのかと考えながら絵本作るのは面白かった。もっと絵本を読みたい。（女子）
⑩ 子どもに本を読み聞かせるのがこんなにいいことだと初めて知った。子どもには読んであげようと思う。（男子）
⑪ 赤ん坊の気持ちになって絵本を作ることができた。（男子）
⑫ 絵本作りを通して昔読んだ本を思い出し懐かしい気がした。絵本の様々な効果を知った。（男子）
⑬ 絵本という少ないページの中にいろいろ押し込めようとしてもだめで，よく考えて作らなければいけないのだなと思った。絵本は子どものころたくさん読んでいて，今ではなんであんなに何回も読んだんだろうと疑問に思っていたけど，何かわかったような気がする。（女子）
⑭ 最初はあまり乗り気ではなかったけれど，いざ絵を描いたりするのは楽しかった。（女子）

おわりに

今回の研究から，高等学校家庭科における乳幼児とのふれあい体験学習は，それが実体験であれ，擬似体験であれ，生徒の対児感情や育児観に良好な変化をも

たらすことが実証された。

広島県下を見回しても，協力的な保育園が近隣にないなど，諸般の事情から実際のふれあい体験学習を行っていない学校も多いようであるが，そのような場合，本研究で試行した擬似体験学習は，有効な方法として，一考に値すると思われる。

リアルケアベビーの指導マニュアルには，６時間の指導計画として「①二人の出会いから生命の誕生へ」→「②赤ちゃんがやってきた（泣くことの意味）」→「③さあ，育児のはじまり（世話の体験）」→「④自宅で子育て体験」→「⑤みんなで子育てについて話し合おう」という情意的，技術習得的モデルが提案されている。一方，今回提示した「①乳児が泣くことの意味を知る」→「②基本的な世話の体験をする」→「③絵本の読み聞かせをする」→「④絵本を製作する」→「⑤０歳児になぜ絵本なのかを理解する（ことばの発達とブックスタート運動）」という９時間の学習モデルは，絵本を媒介にして乳幼児のことばの発達についての理解を促すことを中心に，子育ての情意的かつ知的楽しみを生徒に伝えようとしたものである。ただし学習モデルとしてはまだ完全ではないので，今後，研究を重ねたい。

注

1）柴静子，一ノ瀬孝恵，日浦美智代，藤井志保，鈴木明子『家庭科の保育領域におけるふれ合い体験学習の効果に関する研究』，「広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要」第33号，2005，pp.369-379.

2）京都市の「アトリエ　Mother」が注文を受けて手作りで製作し，販売している人形で，抱き心地がまるで乳児のようである。主に性教育用教材として小・中学校で使用されているとのことである。

3）この乳児人形は，アメリカ NASA の技術者であった Rick Jurmain が1993年に開発したコンピュータ内蔵のロボット人形である。アメリカでは，十代の女子の早すぎる妊娠・出産を防ぐために，中等学校において鶏卵(Egg Baby)や小麦粉袋(Flour Baby)を赤ん坊に見立てて世話をさせ，その煩雑さを体験させることが効果的であると考えられた時期もあった。しかし，反応をしない鶏卵や小麦粉袋では，学習効果に問題があると考えた Jurmain がロボット赤ちゃんを開発したことによって，多くの中等学校で擬似体験のあり方に変化が生じた。この人形の世話をすることになった生徒の手首にはリストバンドが巻かれ，まるで本物の赤ちゃんのように，夜昼なく世話を要求して泣く人形に対処しなければならない。おむつを替える，ミルクをのませる，げっぷをさせる，あやすなどの要求にどのように対処したかは，リストバンドに記録される。このような擬似体験から，生徒は早すぎる妊娠・出産とその後の育児が自分の人生を困難なものにすることを実感し，そのような危険は避けるようになると見なされている。

この人形は，世界の先進国に輸出されており，日本へは，「太郎」と名付けられた男子の人形が送られている。日本での販売は山崎教育システム株式会社（東村山市）が行っており，マイベビーと呼称されている。アメリカのように早い妊娠を防ぐという性教育の教材としてではなく，赤ちゃんとのふれあいを擬似体験させるためのリアルな教材として使用されるケースが多いようである。

なお，この度の研究のために，山崎教育システム株式会社には，人形の貸与に始まり，各種資料の提供など多大な協力をいただいた。記してお礼を申し上げます。

4）「ももやま保育園」は，広島大学附属福山中・高等学校から徒歩で５分の位置にある。生後３ヶ月の０歳児から就学前の５歳児を対象として，午前７時の早朝保育から午後７時までの延長保育を行っている。和太鼓，造形絵画，ちえの実遊びなどを導入することによって，子どもの発達を促している。附属高校の生徒との交流も年間行事に組み込んでおり，ふれあい学習も積極的に支援している。

5）池田幸子氏は，当方の要請により2005年6月28日に広島大学に来られた。読み聞かせのために選んだ絵本は，「わたしのワンピース」他２冊であり，リアルケアベビーを抱いて母親らしく読んでくれた。対象の生徒にはその時のビデオを視聴させた。

6）『読書世論調査2001年版』，毎日新聞社，2001，pp100-175.

7）2005年11月26日に NHK が放映した「ETV 特集－心はどこにあるのか～脳科学者川島隆太の挑戦」の一部を視聴させた。

8）乳児のことばの獲得に関する文献として，以下のものを参考にした。

・岡本夏木『児童心理』，岩波書店，1991.

・岡本夏木『子どもとことば』，岩波書店，1982.

・正高信男『０歳児が言葉を獲得するとき』1993.